客観する人々—いつもの芸術

このテキストはギムホンソックの作品「客観する人々—いつもの芸術（People Objective-Of Ordinary Art）」において、パフォーマーのための台本として機能した。

展覧会：ギムホンソック「いつもの他人たち（Ordinary Strangers）」
会期：2011年４月４日～５月１日
キュレーション：Samuso
会場：アートソンジェ・センター（ソウル、韓国）

パフォーマー：チェ・ボグァン

道具をめぐる考察—椅子を芸術作品に変えるために

※鑑賞者が近づいてきたら、パフォーマーは、できるかぎり朗らかで暖かい態度で対応すること。

　こんにちは。
　さて、何でもない物、たとえば椅子を芸術的な表現に変えるにはどうすればいいのでしょうか。今からその方法について説明したいと思います。
　椅子という物体には、普通、三本あるいは四本の脚が付いています。背もたれ、時には肘掛けがあり、基本的に人々が座るための道具として考えられています。アーティストがこの物体から何らかの意味を生み出すとしたら、その素材、大きさ、形、あるいは色を操作しようとするでしょう。
　実際のところ、このようなことについて考える機会はあまりないですよね。あるアーティストが椅子を使って作品を作ることに決めたとしましょう。もしも実際の椅子の形がそのまま使われたら、通常の椅子と芸術作品として作られたこの椅子がどのように違うのか、わかりづらくなると思います。
　私は最近、椅子の作品を五つ作ろうと決心したアーティストに出会いました。そのひとつひとつの椅子について、今からお話したいと思います。

　一つ目の椅子について説明します。

この椅子を作るにあたって、彼はリサイクル・ショップに行って、スーツケースをいくつか購入しました。ひとつのスーツケースを座面として、もうひとつを立たせて背もたれとして、さらにふたつの小さめのスーツケースを脚として使うことで、椅子の形が出来上がりました。ひとつめが完成したあと、スーツケースを同じように寄せ集めて、さらに10個ほど椅子を作りました。そして彼はそのひとつひとつをブロンズで鋳造しました。鋳造とは、何らかの形を作り出すために、ブロンズを強い熱で溶かして型に流し込むプロセスのことです。彼が椅子をブロンズで鋳造したのは、それを公共的な空間に設置するためでした。広場に置いてみると、通りがかった人々は自然と座りたくなるようで、かなり気軽に座っていました。スーツケースの形をした椅子のそれぞれは40センチくらいの高さで、全体的にがっしりとしており、とても現代的な感じが醸し出されていました。面白おかしい感じと、どこか孤独な感じの両方がありました。

※椅子の形や制作の工程について説明するとき、動いたり身振りを添えたりすることはできるだけ避けて、言葉だけを使って描写してください。

この椅子では、サイズや形や色ではなくて、素材のあり方が強く印象に残ります。では一体どうして、彼はこのような椅子を作ろうと考えたのでしょうか？ 彼はこの作品を《進歩のための椅子》と呼ぶことにしました。定義として、進歩という言葉は、社会的な変革や発展を示すものですよね。特に、歴史的な価値観から見たときにはそうです。でも彼は、変革や発展という大きなプロセスそのものではなくて、それを達成するために捧げられた人々の暮らしの方を強調するために、この言葉を使ったのでしょう。彼が作品の素材にスーツケースを選んだのは、進歩的なライフスタイルを持つ人々は頻繁に旅行するはずだと考えたからではないでしょうか。

次に、二つ目の椅子について説明します。
彼はこの作品を《正義の椅子》と呼ぶことにしました。ふつう私たちは、正義という言葉を、「真実を守るための道徳的な責務」というような意味で捉えています。哲学的に言えば、正義という言葉が意味するのは、個人と個人の間にある倫理的な責務です。それはまた、「積極的に社会を組み立てて、バラバラにならないようにしっかりまとめていく」というような、公的な責任を意味することもあるでしょう。椅子が守るべき責任や椅子が果たすべき公的な仕事があるとしたら、それは何によって構成されているのでしょうか。彼はこのことについて考えました。作品の主題として、どれだけ快適なのか、どんな形をしているのかなど、椅子に添えられた記号的な意味について考えるのではなくて、椅子そ

れ自体にフォーカスしなければならない。彼はそのように確信したわけです。それで、小さな石をひとつ選んだうえで、「椅子がなすべき仕事とは座らせることである」と考えました。その石は、椅子として使うと、とても快適そうでした。なめらかな表面、ほどよい高さとサイズ。人が座るのにぴったりです。ですから、タイトルを知ってからその石を見ると、作品の意味がしっかり伝わってきます。でも、タイトルを知らずにそのまま見るだけだと、椅子ではなく、単なる石にしか見えません。石は椅子に変えられた。しかもそのことは、石を別の場所に移動させるという行為だけによって為された。このことを、この作品をいきなり見た人々にわかってもらうにはどうすればいいのでしょう？ このようなジレンマについて、彼はあまり気を配らなかったようです。ということで、最終的に、《正義の椅子》は単なる石にしか見えなかったのでした。

次に、三つ目の椅子について説明します。

いくつかの理由によって、実際にこの椅子を作ることはできませんでした。ということで、三つ目の椅子は、彼の想像の中に、いつか実現するかもしれないプランとして存在しているだけです。といっても、この椅子も彼のプロジェクトの一部なので、紹介させていただきます。

彼はこの椅子を《権利の椅子》と呼ぶことにしました。一般的な考えとして、権利という概念は、権力と利益によって構成されています。それはまた、誰もが正当に保持することができる権力もしくは能力として説明することもできます。あるいは、それは、市民としての権利、社会的な権利、そして私的な権利によって構成されていると捉えてもいいでしょう。権利の反対は強制であると言うこともできます。彼は、この椅子を作るにあたって、特定の形にしたり、特定の素材を使ったりすることはやめました。権利の意味をきちんと捉えるためです。特定の色や形を選ぶこともやめました。そのかわり、彼は、どこにでもあるような椅子をたくさん手に入れて、それぞれをいろいろな街角やビルの屋上に起きたい、あるいは五階建てのビルの壁にも取り付けたいと考えました。ビルの屋上や壁に椅子を取り付けるときは、落ちないように、しっかり固定することにしました。ビルの屋上あるいは壁に設置された椅子に座った人々は、そこから下に広がる風景を見渡すことができます。路上で椅子に座った人々は、多くの通行人を目にすることになります。一方で彼らは、歩行者の視線に自分の姿を晒すことにもなるわけです。計画によると、ほとんどの椅子は街の中心部、およそ3000平方メートル、坪で言えば900坪の範囲に配置されることになっています。椅子の数は全部で約40脚です。人々はそれぞれの椅子と自然な形で触れ合うことができるのでしょうか？ 椅子は雨や風によってすぐに傷んでしまわないでしょうか？ 自治体の責任者やビルの管理者から、椅子の設置の許可を得ることはできるでし

ょうか？ パブリック・アートの関連組織について十分な知識を持っていないからこそ、彼はこのような作品を作ろうと考えてしまったのでしょうか？ あるいは、実現は不可能であるということ自体が、《権利の椅子》のコンセプトにふさわしいと考えたのでしょうか？ この椅子は実際には日の目を見なかったわけですが、とはいえそれは本質的にどのような意味を持つのでしょうか？ 想像されただけの椅子、つまり単なる「可能性」でしかないものを、完成された芸術作品と呼ぶことはできるのでしょうか？

次に、四つ目の椅子について説明します。

この椅子は１年ほどの時間をかけて作られました。徹底的な計算と、いくつかの技術的な問題の解決が必要だったからです。他の椅子よりも多くの努力を要したことから考えて、彼はこの椅子に、他の椅子よりも強いこだわりがあったのかもしれません。温度を制御するための装置がかなり複雑なもので、それを椅子のクッションの中に組み込むにあたって、技術的な問題があったのです。まず彼は、「プルーストの安楽椅子」と呼ばれる、1978年に作られた名作を購入しました。「プルーストの安楽椅子」とは、アレッサンドロ・メンディーニによるデザインで、画家のポール・シニャックの作品を引用したものです。形態は、18世紀のネオ・バロック様式に似ていますが、フレームと全体のクッションには、印象派の方式による点描が施されています。全体的に、とても派手な形と色をしています。彼はこの高価な椅子を五脚も購入し、その内側に、自動車のシート、電気のパネル、そして電動の温度制御装置を組み込みました。マッサージの機能も組み込まれたので、この椅子に腰掛けると、あたたかい座面からマッサージを受けることができました。具体的な金額は言いませんが、この椅子の値段は信じられないくらいの金額です。彼はこの椅子を《民主主義の椅子》と呼ぶことにしました。こんなにも高価で贅沢な椅子にこのようなタイトルをつけることは、議論を呼ぶのではないでしょうか。普通、民主主義は、民衆が権力を持って自治を行う政治のシステムとして理解されています。あるいは、そのような政治に繋がるような思考のあり方そのものが民主主義であるとも言えるでしょう。彼は、この椅子によって、民衆の権力という概念を大げさに強調したかったのでしょうか？ あるいは、もしかしたら彼は、「民主主義」という考え方の現状について、皮肉を言おうとしているのでしょうか？ あるいは、独裁や全体主義を克服できるからではなく、単にもっとも高級で、贅沢で、ゆえに最高の考え方のはずだという理由だけで民主主義を称賛する、そんな私たちの態度を批判しているのでしょうか？

いよいよ、最後の椅子について述べます。

この椅子の形態はベンチに似ていて、それが公共空間に設置されました。彼が意図したのは、実際に座ることができない椅子を作ることでした。別の言い方をすると、「座る」ということについて考えるとき、「休む」「動きを止める」「滞在」「安全」といった言葉が浮かんでくるわけですがが、彼が考えたのは、それと逆の状態を表現することだったのです。つまり、「働く」「進む」「運動」「変化」といった言葉、あるいは何らかの動作に関わる他の言葉を思い起こさせるような、そんな状態の表現です。ということで彼は、有刺鉄線を使ってベンチを作ることにしました。基本的な骨組みを有刺鉄線で作ったあと、その内側を同じ鉄線で埋め尽くしました。同じ素材と方法で、三種類のベンチが作られました。それぞれ形は違います。ひとつはハングル文字の「ニウン」、つまり「L」の縦棒を短くしたような形です。ひとつは円形です。もうひとつは、「L」の角を内側に狭めたような形で、鋭くなった先端が地面に刺さることで安定します。

それぞれのベンチはほぼ似たようなサイズで作られましたが、中には８メートルの高さを持つものもありました。

※ベンチの形について説明するとき、動いたり身振りを添えたりすることはできるだけ避けて、言葉だけを使って描写すること。

結果的にどうなったかと言うと、作品が置かれた場所を探してやってきた人たちや、たまたま近くを歩いていた人たちは、有刺鉄線のベンチに座ろうという気にはもちろんならないので、一定の距離から眺めることしかできませんでした。彼はこの作品を《革命の椅子》と呼ぶことにしました。これをもって、私が先日知り合ったアーティストが作った、いくつかの椅子の作品についての説明を終わります。

パフォーマー：チャン・ソヨン

純粋な物質をめぐる考察―石を芸術作品に変えるために

※鑑賞者が近づいてきたら、パフォーマーは、丁寧に彼らの注意を引くようにする。騒々しくしたり、鑑賞の邪魔をしたりしないこと。

こんにちは。今から石を素材とした私の作品について解説したいと思います。完成された作品の代わりに、この解説そのものを、石をめぐる芸術的な実験の提案として受け取ってもらえたら嬉しいです。この提案は、誰に対しても開かれています。都市に住む人々のための記念碑であると同時に、都市計画の側面を含んだ公園でもあるような、そんな作品の提案です。

石はどこにでもあるので、私たちにとっておなじみの物体です。たとえば旅行のときに、旅先の思い出が詰まったお土産として、石を拾って持ち帰ることがあります。済州島に行けば、玄武岩の欠片を持ち帰ることもあるでしょう。旅の思い出は、石という物質に保存されることで、ずっと大切に守られつづけることになります。また、「水石」という習慣があります。形の良い石を収集して、それを鑑賞する文化的なたしなみです。ひとつひとつの石の優劣はさておき、この習慣それ自体に、人が自然に対して抱く畏敬の念が反映されています。水石のコレクターは、真理を探す求道者のようなものです。彼らは石を集めて、それに意味を与えて、そしてひたすら吟味しつづけるのです。アーティストもまた、石について思いを巡らせると、深く考え込まざるを得なくなります。石という素材の性質について考え、それに基づいて作品を作るとしたら、どのような可能性があるのでしょうか。皆さんはそのようなアートのやり方に馴染みが薄いと思いますので、いくつか例を挙げたいと思います。

・石をひとつ拾って展示空間に置く。
・人々を招待して、その石を展示空間で見てもらう。
・いくつかの石を集めて配置する（たとえば積み上げる、平行に並べる、互いにくっつけるなど）。
・石をひとつ選び、それを彫って何かの形にする。
・石の型を取り、ブロンズ、石膏、シリコン、砂などで成型する。
・紙に石の絵を描く。
・石を写真に撮る。
・石をビデオに記録する。
・石を放り投げて遊ぶ。
・大きな石をその場で切断する。
・石を粉末にして、それを使って別の形を作る。

多くの方法がありますが、アーティストにとって、石を素材にするということは、近所のお店で買ってきたジャガイモ一袋を素材にすることとは大違いです。別の言い方をすると、アーティストにとって、石はジャガイモよりもずっと神格化されたものなのです。石は、人間に対して、ある種の抽象的な力を発しているかのようです。アーティストなら、石に指を触れることすら憚られると感じることもあるでしょう。石を彫ったり、別の場所に動かしたりすることは、人類の果てしない傲慢さと強欲さを象徴する行為なのではないか、と恐れているのです。それにも関わらず、石を展示したいという欲求に駆られるアーティストは、逆に、石を見ることができる場所に観客を連れていくこともあるでしょう。中には、彫ることは石への冒涜であると考えて、彫り込みを入れていない部分はできるだけそのまま残したり、石の代わりにコンクリートを使って彫刻を作ったりするアーティストもいます。もちろん、巨大な石を好きなように彫ったり、大きい石を好きな場所に移動させたりするアーティストもいます。このような態度は、倫理的な尺度や決まりによって規制されるべきではないと思います。ご存知のように、そのようにして作られた作品は、十分に長く保存された場合に、歴史を伝えるものとして、あらためて受容されることになります。さらには、地域経済を助けるものとして考慮されることもあるのです。

ここで、石を組み入れた芸術作品をひとつ提案したいと思います。

この作品のタイトルは《孤独な旅路》です。この作品にとって一番重要なのは、設置する場所です。なぜかと言うと、この作品には、壮大な文脈を作ることが必要だからです。そうしてはじめて、この作品の中で、石が真の力を発揮することになります。まず、高層ビルが立ち並ぶ都市を見つけなければなりません。そして、この作品はふたつのビルの間に設置されなければならないので、少なくとも、ビルをひとつ購入する必要があるでしょう。次に、購入したビルを壊し、更地にします。そうすることで、左右のビルの間に何もない空間が生まれます。

それから、石について詳しい人の協力を得て、全国の岩山、もっと良いのは全世界の岩山ですが、そのすべてを洗いざらい調べて、その中から最高の形と最高の意味を選びます。さらに、もし可能であれば、もっとも小さい石ともっとも大きな岩があるといいでしょう。50階建てのビル全体を埋め尽くすのに十分な量の石が必要だからです。それから、風水の専門家、地質学者、詩人、庭師、建築業者、構造技術者など、山と建築についてのエキスパートたちを集めて、人工的な石の山を作る方法について話し合ってもらいます。このミーティングは、このプロジェクトの中でもっとも幸福な瞬間であるように思えるかもしれません。エキスパートたちの意見がぶつかり合ったとしても、そのぶつかり合いによって、このプロジェクトの根本的な土台が崩れないようにすることが大事です。

まず、 六角形の形をした50階建てのビルを建てます。このビルは、最初の段階では壁をつけず、構造的な骨組みだけで出来ています。次に、専門家たちの助けを借りながら、一階から順に石を積み重ねていきます。こうして、45階建てのビルの高さに相当する高さの石の山を作るのです。もしも可能なら、この石の山に似合うような木や草なども加えます。予算に余裕があれば、全体のバランスを見ながら、滝や池を作るのも良いと思います。それによって、ただの石の山ではなく、さまざまな自然の音が聞こえるような山に変わります。この山が完成したら、骨組みに外壁を付けます。全面がガラスで出来た壁です。山の土台の部分は、もしも可能なら、コンクリートで固めるようにします。この工程がすべて終わったら、プロジェクトは完成です。

完成後、このビルと石の山は道を歩く人たちの目に晒されます。この山は、誰でも登ることができます。頂上の傾斜は厳しいものですが、多くの人が登ろうとするでしょう。

このビルの利用にあたっての決まりについてお伝えします。ビルに入るには予約が必要です。一度に中に入れる人数は10人までとなっていて、それ以上は入ることができません。山に滞在できる時間は長くても20分までに限られています。ビルは24時間ずっと開いています。食べ物の売店、シャワー、音楽がかかった空間、コーヒーが飲める場所といった、文化的な設備は何もありません。入場料は無料です。斜面から落ちたり、何らかの事故があったりしても、運営側は責任を持ちません。

この石の山は、着想しただけの段階において、すでに哀しさを湛えています。でも、この山のターゲットは、都市の中で贅沢な生活をしている裕福な人たちなのです。また、このような石の山の制作を提案している私自身も、これが実際に建造されることには慎重です。たしかに、人工的な島が作られたり火星への飛行が計画されたりしている時代ですから、このプロジェクトが完成したとしても、特別な例ではないかもしれません。でも、もしも本当にこのような石の山が実現したら、その瞬間に、私たち人類が生まれながらに罪深い存在であるということが、あらためて明らかになってしまうと思うのです。

パフォーマー：キム・ユナ

形を成さない物質をめぐる考察—水を芸術作品に変えるために

※鑑賞者が近づいてきたら、パフォーマーは、刺々しくしたり、無理強いしたりすることなく、穏やかな態度で話を進めること。

　こんにちは。今日は、水についての芸術作品について説明したいと思います。ご存知のように、水という物質は、造形することが難しいという性質を持っています。それでもアーティストたちは、水を作品に組み入れ、表現しようとします。水を視覚的に表現することが難しいのは、その形を捉えることが簡単ではないからでしょう。水が抽象的な素材として考えられてきたのはそのせいだと思います。アーティストたちは、おそらくそのような抽象的な性質に注目して、水をメタファーあるいはシンボルとして使ってきました。水を使って、愛、洗練、美、あるいは人生さえも表現するわけです。
　でも私の場合、水について考えると、どうしても涙について考えてしまいます。涙は海や川のように大きなスケールの水の集まりではありません。雨に似ているところはあるかもしれませんが、いずれにせよ、涙は人間が生み出すものです。つまり、涙はひどく感情的なものであり、歴史的なものでもあります。
　だからこそ、私は、涙を要素として扱う芸術作品が好きなのです。あるアーティストは、彼自身の部屋に貼られた壁紙を使った作品で、涙を表現することに成功しました。部屋の壁のひとつは、天井から床まで伸びる幅3ミリの「涙」によって切り裂かれていました。それ以外、部屋は空っぽでした。それがこの作品のすべてです。つまり、壁紙の裂けた部分が涙の痕に似ていたのです。それが天井から床まで続いていたことを考えると、長さは3メートルくらいだったのではないでしょうか。
　また、涙を表現した彫刻作品も知っています。素材は鉄で、粒の部分は実際の涙の滴と同じようなサイズです。それがたくさん繋がって、3メートルから4メートルの長さになっています。この作品は、これが100本ほど天井からぶら下がったものでした。近づいてみると、ひとつひとつの滴の長さは5ミリくらい、幅は2ミリくらいで、それが連なって、全体としてひどく細長くなっています。先端は丸くなっていて、まさに涙の形そのままでした。人々が通ると、この「涙」のすべてが空気の流れによって動き、さわやかな音が聞こえるようになっていました。その響きは、人によっては、孤独で悲劇的な音のように感じられるかもしれません。
　私の作品の中にも、涙を使ったものがあります。その作品について、具体的にお伝えしたいと思います。まず、愛と悲しみの両方を知っている、一般の人と出会います。悲しみを知っているという考えはどちらかというと抽象的なものですが、多くの方はそれが何を意味するのかわかってくれると思います。その方をこの場所に招待して、愛と悲しみにつ

いて一緒に話します。愛と悲しみについての会話が終わって、その方も、私も、涙が溢れてくるのを感じたとき、この作品は終わります。
　では、この作品を今からお見せします。

※ここで涙を流す。

パフォーマー：キム・ギョンボム

倫理的な態度をめぐる考察—人々を芸術作品に変えるために

※鑑賞者が近づいてきたら、パフォーマーは、可能な限り落ち着いて彼らを歓迎すること。立ったままで彼らに顔を向けること。

　こんにちは。今日は、行為や状況を要素とする芸術作品についてお話したいと思います。このような種類の作品は、普通は「パフォーマンス」と呼ばれます。あるいは「パフォーマンス・アート」と呼ばれることもあります。ご存知のように、パフォーマンスは、演劇と同じように、台本に基づいて進行するものを指すこともあります。舞台で行われるようなタイプですね。あるいは、観客が作品に巻き込まれるような、参加型のイベントを指すこともあります。さらに、パフォーマンスの中には、ドキュメンタリーの側面を持つ作品もあります。その作品を作る過程で行われた作業が、そのまま観客の目に晒されるようなタイプです。現代ではテクノロジーが発展していますので、ビデオカメラをはじめとして、さまざまなメディアが身近にあります。ですから、もはやパフォーマンスは、ある特定の場所だけで起きる出来事だとは限りません。特定の人たちだけに向けられるべきでもありません。たとえば、誰も知らない場所、個人的な空間、あるいは他の人に出くわすことがないような領域で、ある行為が行われ、それが記録され、その記録が送信されて、ようやく観客に届くというような場合もあります。映像作品なのか、パフォーマンス作品なのか、決めることが難しいような例もあります。

　では、なぜアーティストたちはパフォーマンスを実行して、それを芸術作品と呼ぶのでしょうか？ そうした作品と舞台やダンスとの違いはどこにあるのでしょうか？
　私はこの質問に対する答えを持ち合わせていません。でも私は、野心的な決意をしました。演劇的であると同時に偶発的なもの、高尚なアートのようでありながら観客の参加を

含むものを計画して試してみよう、と。それは、台本のあるパフォーマンスになると思います。私自身が参加するのではなくて、役者の方々がリハーサルから実演までを担当します。会場はいわゆる舞台ではなくて普通の場所です。観客は、受け身になってそれを見るのではなくて、自発的にそれに参加することになります。定まった結末のない、どうやって終わるのか誰にもわからないような「オープン・エンド」なパフォーマンスです。私のアイディアは、パフォーマーは芸術作品の制作プロセスを説明し、観客はその説明を聞くというものです。別の言い方をすると、展示空間に配置された物体ではなくて、芸術作品について説明する人々とそれを聞く人々によって構成される風景そのものが作品となります。つまり、目には見えませんが、芸術作品がそこにあるということになります。目に見えない、でも作品はそこにある。その姿は、観客のひとりひとりの頭の中で、違った形で想像されるわけです。

※誰かひとりを指差す。

　はじめまして。あなたに質問があります。最近、幸せだなあと一番つよく感じたのはいつですか？ そのときのことを今ここで皆さんに話してもらうことはできますか？

※その人の話を聞く。興味を引かれた点について、全員で話し合う。負担に感じない範囲でその会話を続ける。もし負担に感じたら、やんわりと会話を終わらせる。

※説明した内容について質問を受けたら、知っている範囲でしっかり答えること。

パフォーマー：イ・ヒョンゴル

表現をめぐる考察—コンセプトを芸術作品に変えるために

※鑑賞者が近づいてきたら、パフォーマーはできるかぎり落ち着いた態度で彼らに対応すること。パフォーマーは席に着いたまま話すこと。

　こんにちは。今日は、たったひとつの言葉が芸術作品に姿を変える、そんな状況についてお話したいとおもいます。

芸術作品によって「忍耐」を表現するにはどうすればいいのか、ずっと考えてきたアーティストがいました。彼はしっかりとした美術の教育を受けた専門家で、「民衆美術」と呼ばれる絵画によって、高い成功をおさめた画家でした。彼の典型的な作風はある種の風景画です。とはいえ、彼の風景は、たくさんの虐げられた人々や疎外された人々で埋め尽くされています。でも、彼の作品の多くは、状況を遠くから眺めて描かれているようでした。それもそのはず、彼は、そのような人々に話しかけたことも、彼らと会話をしたことも、そして会ったことすらもなかったからです。この事実は、だんだんと彼が成功していくにつれて、少しずつ広まっていきました。虐げられた人々の暮らしについて本当に知っているのか、いろいろな人が彼に尋ねるようになりました。でも彼は、他の人たちの暮らしを「本当に知る」なんていうことが本当に可能なのかどうか、疑問を持っているようでした。虐げられた人々の生活の実態を見ることは、アーティストが取るべき態度とうまく噛み合わないのではないか、と感じていたようです。仮に、人々の生活の実際のところを描こうと考えたとしても、人々に対して何らかの感情、たとえば同情の念を持ったなら、それによって客観的な視点は崩されてしまいます。そしてついには、やろうとしていた表現が壊れてしまうでしょう。だから彼は、世界の実態を客観的に観察して描写するドキュメンタリー作家のようになるのではなくて、メタファーを通じて社会を捉える小説家のような態度を取ることに決めたのでした。ということで、彼はそういった批判に耳を貸さなかったのです。あるとき、2年近くも、新しい作品を作らずにずっと家に籠ったことがありました。友人が心配して彼の家を訪れたり電話を掛けたりしたのですが、彼はドアを開けず、電話も取りませんでした。自分の仕事を失敗と感じて、道半ばで筆を折ることに決めたのか、あるいは壮大で野心的な名作を作るためにひとりで格闘していたのか、誰にもわかりませんでした。ある日のこと、突然、彼は外の世界に出てきました。展覧会を開催して、8点の絵画を展示したのです。どの絵も、いかにも抽象的なイメージで埋め尽くされていました。タイトルは「忍耐」でした。「忍耐」などという抽象的な表現を、彼はいかにしてキャンバスの上で表現したのでしょうか？ 一般の人々は彼の絵のスタイルにしか関心を持たなかったのですが、彼のことをよく知る人たちは、そこに至るまでに彼がくぐり抜けてきた精神的な苦痛について思いを馳せました。タイトルに「忍耐」とつけるだけで、真の意味で「忍耐」を表現することが可能なのでしょうか？ そして、忍耐が持つすべての意味を小さなキャンバスに注ぎ込むことは本当にできるのでしょうか？ そもそも、アートが何かを表現するということ自体が不可能だということなのでしょうか？

その展覧会に出されていた絵の多くはモノクロームでした。そのうちいくつかは、一色だけが丁寧に塗られたもので、それによってキャンバス自体が前面に出てきます。ほかの作品では、何種類かの絵の具がじっくりと混ぜ合わされて、くすんだ色の塊が出来上がっ

ていました。つまり、この展覧会の絵に使われた色彩は、混色もあれば原色もありました。あまりにも混ぜられたために、灰色ともベージュとも言えないような、あるいは埃の色のような、そんな色がありました。一方で、まるでチューブからそのまま出されたかのような、素人が使うような生々しい赤色もありました。つまり彼は、「忍耐」というコンセプトを、キャンバスや絵具に対してあてはめたということなのでしょうか？ あるいは、辛抱するという感覚を、わかる人だけにそのまま伝えようとしたのでしょうか？ 絵のタイトルは展覧会が終わったあとに決められたので、作品の文脈や、背後にある意図について、彼が自分で説明することはありませんでした。この展覧会のあとも制作を続けましたが、結局、このシリーズの作品について説明することは一度もありませんでした。そして現在、彼は、「知識」というテーマで作品を制作しています。

※説明を終える。
※鑑賞者に向けて、説明が終わったことが伝わるようなポーズをすること。

翻訳：奥村雄樹
Translated by Yuki Okumura